研究開発促進事業
日本海西部沿岸域におけるケンサキ・ブドウイカ資源の管理技術開発総合研究（抄録）

大野明道・森脇晋平・石田健次

島根県におけるケンサキ・ブドウイカは年間1千数百トンから2千数百トンの漁獲範囲を推移している。主に釣り漁業によって漁獲されており，沿岸の釣漁業にとって重要な対象種である。

本研究はケンサキ・ブドウイカの資源診断・漁況予報を目的とし，1981年から5年間の計画で山口県・島根県・鳥取県および兵庫県の共同調査として実施している。

本年度実施した調査は，漁獲量調査，幼イカの分布調査，生物測定調査，および標識放流調査である。詳細は島水試資料№13を参照されたい。

要　　約

春先に漁獲されるのは，熟度や銘柄組成から推定して産卵群であると考えられ，この漁獲量と7月下旬から8月上旬に出現する幼イカの数とは正の相関がみられた。この群の出現は，定置網の漁獲状況からみて，西部海域，島根半島沿岸，および隠岐諸島とも時間的なズレは見られない。これを対象とした昼イカ釣は，西部海域では盛んであるが，島根半島沿岸や隠岐諸島では少ない。

西部海域では6月頃から12～16cmの未熟な群の来遊が増加しはじめ，6・7月にピークをむかえる。これにともなって漁場の沖合化がすすむ。8月下旬から9月上旬にかけて成熟率が高くなり再び産卵群の加入が推定される。しかし，9月下旬以降は大部分が未熟群で構成され，この時期熟度の不連続が生じ，群の交代が推察された。これは漁況の面からも支持できると考えられた。この群の来遊により，隠岐海狭を中心とする漁場は盛漁期に入る。この群は隠岐の定置網には入らないようである。また，この群の西部海域での漁獲量は6・7月に比べると少ない。

隠岐海狭の漁場を中心とした漁況には共通性がみられるが，西部海域との関連は弱いようである。これは西部海域が6・7月に来遊してくる群を主に対象としているのに対して，隠岐海況の海場は9・10月に盛漁期がみられることに原因しているのではないかと推察される。これら二つの海域における漁況，系群，移動などの関連性は今後に残された問題である。